希望の花

今から二百年ほど前の江戸時代のことである。

久蔵(きゅうぞう)たちを乗せた(1)樽廻船(たるかいせん)は、江戸を目指して旅立った。しかし、何日か過ぎた頃、海は荒れくるい、一番大事な舵(かじ)が強い波にもぎとられてしまった。食料も水も少なくなる中、船は二ヶ月半の間、広い太平洋を流され続けた。ようやくたどり着いたところは、氷におおわれた国、ロシアの(2)カムチャッカ半島だった。

船乗りたちは、吹雪の中、助けを求めて歩き始めたが、そこは見渡す限り氷の平原でしかなかった。寒さのために次々と仲間が死んでいった。久蔵もとうとう一歩も歩けなくなり、氷のように冷たい雪に埋もれて体の感覚もなくなっていった。自分も死んでしまうのだとあきらめそうになる度に、故郷の景色や母の姿が浮かんでは消え、運よく仲間やロシアの人たちに助け出されるまで、なんとかふんばることができた。

しかし、雪の中に三日間も埋もれていた久蔵の足の指はひどい凍傷になっていた。ロシアの医師、ミハイラ先生に診てもらうと、凍傷になった足の指を切り取らなければ、全身が腐ってやがて死んでしまうと言われた。そのころの手術は麻酔(ますい)もなく、想像を絶する痛みと苦しみをともなうものだった。久蔵は迷ったが、歯を食いしばり激しい痛みにたえ、右足の指二本と左足の指すべてを切り取る手術をうけた。

その頃、船乗りたちは、ロシアの船で日本に帰ることができることになった。久蔵も、日本に帰りたい一心で痛みをこらえ船に乗ったが、まだ傷口が完治していないことを理由に、一人船から降ろされてしまった。

翌朝早く、船の出発を告げる合図で目を覚ました。周囲を見渡したがだれもいない。自分一人が取り残された孤独感に、久蔵は顔を手でおおい、体をふるわせて泣いた。

それからというもの久蔵は、食事をとることもしなくなり、ただ横になっているだけの毎日が続いた。

そんなある日、(3)天然痘(てんねんとう)の予防接種の話を耳にした。当時、天然痘は世界中で恐れられていた伝染病だった。

「日本では、天然痘は、流行すれば多くの者が死んでしまう病気なのです。本当にそれを予防することができるのですか。」

異国の地ロシアであっても本当にそんなことができるとは信じられなかった。

「確かに、一度天然痘にかかってしまうと死ぬ可能性は高い。だからこそ予防をするのだ。」
真剣に話すミハイラ先生の言葉に興味をもった久蔵は、予防接種を見せてもらうことにした。
ミハイラ先生は、子どもたちに腕を出させ、次々と小刀で傷をつけてから薬を塗りつけ、布を巻いていった。
（これだけ？）
一生、天然痘にかからない方法だというので、大がかりなことをするにちがいないと思っていた久蔵は、あまりにも簡単な方法にあっけにとられてしまった。久蔵の故郷では、毎年、天然痘の流行がしずまるようにと大々的に[4]祈とうが行われていたことを思い出した。それでも、たくさんの人が天然痘で命を失っていたのだ。
久蔵はその夜、ミハイラ先生の部屋に行き、あらためてその日見た天然痘予防の方法について尋ねた。その技術は、聞けば聞くほどすばらしかった。熱心に聞いていた久蔵を見て、ミハイラ先生は5日後の診察も見にくるようにと言った。
五日後、予防接種をした子どもたちが集まってきた。ミハイラ先生を見るなり泣き出す子もいたが、ミハイラ先生はおかまいなしに、その子たちの腕を出させ、見つめると、
「アニ　ツベート（花が開いた）」
と笑顔で満足そうに言い、親たちとともに喜んでいた。
「花？」
久蔵も、子どもたちの腕を見せてもらうと先日予防接種をした部分がはれて小豆のように赤みをおびていた。それはたしかに小さな花のように見えた。
「なぜ、そんなに喜んでおられるのですか。」
「子どもたちの腕にこの花が咲けば、子どもたちは一生天然痘にかからない。」
「それは本当ですか。ミハイラ先生、私にも予防接種の方法を教えていただけませんでしょうか。」
「次に私が予防接種をするのを、よく見ていなさい。きっと君にもできるようになる。」
久蔵は体がふるえるのを感じた。
その日の帰り道、氷の溶け出した海に目をやった。故郷のおだやかな海とそこでくらす人々を思い浮かべながら、久蔵は固く口を結んでうなずいた。
それからというもの、久蔵は毎日ミハイラ先生のもとに通い、予防接種があると聞けば、助手として付き添い、大切なことをもらさないように見たり聞いたりメモに書きとめたりした。天然痘予防についての本も読んだ。そのうち、ミハイラ先生から許しを得て、久蔵も一人で予防接種ができるようになった。くり返し予防接種を行うと手際よくできるようになり、ロシアの人たちから「ドクトール　キュンゾ（久蔵先

生）」と呼ばれるようになった。

ついに、久蔵が日本に帰ることが決まった。久蔵の「故郷に持ち帰り、医者としてたくさんの人の命を救いたい」という強い思いに、ミハイラ先生は、予防接種に必要な道具をそろえてくれた。

いよいよ船出の時、久蔵の胸は高鳴っていた。そして、行く手に広がる、きらきらと輝く海をじっと見つめていた。

【注】

（1）江戸時代に、主に上方から江戸に酒荷を輸送するために用いられた廻船（貨物船）のこと。

（2）ロシア連邦東部にある大きな半島。アジア大陸北東部に位置し、北北東から南南西に長く延びている。

（3）伝染力がきわめて強く、昔は大流行を繰り返して多数の死亡者を出した急性発疹性伝染病。

（4）修行によって得たと信じられる法力によって信者のさまざまな欲求を実現しようとする行為。

【参考文献】

吉村　昭（著）（一九八八）「花渡る海」中央公論新社
川尻町立川尻小学校PTA（発行）（二〇〇四）「川尻浦久蔵」
川尻町誌編さん委員会・呉市史編さん委員会（編）（二〇〇七）「川尻町誌　資料編」
川尻町誌編さん委員会・呉市史編さん委員会（編）（二〇〇八）「川尻町誌　通史編」